

## 地方の風景



### 飯田 拓基

島根大学大学院自然科学研究科環境システム科学専攻  
[690-8504] 松江市西川津町1060  
准教授, 博士(工学).  
専門は有機合成, キラル高分子.  
iida@riko.shimane-u.ac.jp

<http://www.ipc.shimane-u.ac.jp/fmchem/index.html>

「島根でうまくやれるだろうか」。7年前、漠然とした不安を感じながら縁もゆかりもなかった島根大学に着任した。事前に情報はほとんどもっていなかったが、地方国立大学は苦境に陥っているとささやかかれて久しく、都市部から離れた大学はとくに厳しい状況にあることは想像できた。しかしながら、PIとして研究室を任せられ、思うままに研究を行えるという恵まれた環境を用意していただいていた。研究者冥利に尽きる機会が幸運にも訪れたと感じ、ここが正念場だろうと心中に期するところもあった。だがあえて肩の力を抜いて臨もうと考えていた。というのも着任前の私のワークライフバランスは完全に崩壊していた。それまではほぼすべての時間を仕事に使い子育ても妻任せ。といって仕事の効率が良いとも思えず、これではまずいと感じていた。島根ではワークのみならずライフの再立ち上げも必要だった。

研究室には中央実験台もなかったため、実験台や真空ラインを設置するところから始まった。予算は限られていたので、配属された4年生とともにああでもないこうでもないとして設置作業や工作に明け暮れる愉快的時間を過ごした。数カ月後ようやく実験に着手できる状態になったが、8月に着任したためこの時点ですでに年末となっておりその後の卒業研究も突貫工事の連続であった。ほとんど研究は進展しなかったが、大小さまざまな問題に対する解決能力を要求され続けた年で非常に楽しかった。研究の過程を楽しむことを忘れかけていたことに気付かされた。学生もまっさらな状態であり結果はなかなか出なかったが、ここは大事な期間だと考え、焦らず数年間は研究室の地力と文化を育てるために時間をかけることにした。

大学のある松江市は古くは律令制下の出雲国府が置かれ、江戸時代には出雲・隠岐を統治した松江藩の城下町として栄えた地方都市であり、街には独自の文化が息づいている。キャンパスは松江城の現存天守を遠望する住宅街の中に広がっている。多くの教職員・学生は大学近傍に住んでおり、私も通勤にまったく時間をとられないようになった。松江では時間がゆったり流れているようで周囲の人々は親切であった。住環境も素晴らしく、とくに子育て中のわが家にとって大変

暮らしやすく感じた。車で10~15分も行けば、四季折々の自然の美しさを感じられる山々や砂浜の広がる海岸、風光明媚な宍道湖、そのほとりの随所に湧く温泉にアクセスできる。そして、どこへ行ってもまず人混みや行列とは無縁であり、当初はこんなに良いところがなぜ貸し切り状態になっているのかと訝しんだほどである。休日には子どもを連れて海へ山へと遊びに行くようになり、一緒に過ごす時間が増えた。そうこうしていると第三子が誕生し、遅ればせながらではあるが子育てにも(少しだけ)参画しはじめた。妻からはことあるごとに「島根に来る前の悪行は忘れていない」と責められるのだが、遅きに失したとはいえ子どもが成長する幸せな時期を逃さなくて良かったと思う。

自分なりにワークライフバランスを調整できるようになると、仕事で創造的なアイデアが出やすくなったように感じる。とても偉そうなことを言える成果はないが、学生とその過程を楽しみながら真剣に研究に取り組んでいると徐々に納得できる結果も出始めた。地方大学の地盤沈下は間違いなく進行しており、もどかしさを覚えることもある。しかし、教職員の奮闘のお陰で創造的な研究を行える設備や人的資源などの基盤はしっかり残っているように思う。外部からではわかりにくいですが、じっくり自分の研究を育みたいと考える若手研究者にとっては、良い環境だと思う人も多いのではないかと。

さて、仕事も私事も上手にこなしてきたわけではないので、先輩からのメッセージをと言われても戸惑うばかり。ただ私に限って言うと、120%の力で仕事に全力投球した時と同じくらい、肩の力を抜いて取り組んだ時に学び得られたことも多かった。「爪先立ちして背伸びしても長く立ってられないし、大股で歩いても長くは歩けない」とは老子の言葉だったか。偉人の格言を言い訳にして、オフの日は子どもと他愛もなく遊ぶのである。困難も多い研究者の道、諸先輩方の体験談を拝聴しても歩むには覚悟が必要なようだ。ただ、たとえ道に迷っても地に足をつけて自分の進みたい方向に歩いていけば、あとにケモノ道くらいはできるだろう、できたらいいなあ、と思っている。